

堀江健也先生を偲んで

古川 明



日本医史学会の会計監事堀江健也先生は昭和五十八年十二月十四日に逝去された。享年六十九歳。先生は大正三年八月十三日東京に生まれた。昭和五十八年二月食道専門部狭窄のため、東京女子医大病院で手術を受け、その後回復して、五月の第八回日本医史学会総会（横浜）には元気なすがたを見せてくれた。これからも引続き本会で活躍されることを期待していたのに、病気が再発して亡くなられたことは誠に残念である。

堀江君（以下君付けで呼ばせて頂く）は東京府立五中を経て、昭和十四年慶応義塾大学医学部を卒業し、直ちに病理学教室助手となった。戦時中は応召のため長期間外地（中支）で過ごし、

戦後教室に戻った。二十六年から三十一年まで講師を務め、以後四十九年三月まで兼任講師として、公務員共済組合立川病院に勤務した。四十年に「実験的骨肉腫の研究」で、慶大北島賞を受けた。四十九年より練馬総合病院検査科長となり、また練馬区医師会会員として、自宅（練馬区氷川町）で内科を開業し、医師会理事も一期務めた。

本会には五十一年に入会し、五十三年評議員に選ばれ、五十四年より会計監事となった。第八〇回総会（昭和五三、東京）で、「脳卒中の病理学説の史的変遷」の特別講演を行ったが、この問題については、共同研究者相沢豊三立川病院長が第一回脳卒中学会総会（昭和五一）に会長演説として発表したことがある。

練馬区医師会の機関誌「練馬区医師会だより」には、「医学の散歩道」の題で、五十一年から約八年間八十回以上にわたり、医学史関係事項を詳しく解説的に報告している。これは医学参考書として、単行本にまとめる価値があると筆者は推察している。「池田謙齋」（日医史誌一四三二号）が堀江君の絶筆となった。彼の几帳面で精力的な執筆は慶応義塾大学医学部六十周年記念誌（昭和五八）の編集のとき発揮された。一番書きにくい「通史」を、大鳥蘭三郎教授と共同担当ではあったが、短期間に約百五十ページにわたる文としてまとめ上げたのには驚嘆させられた。以上思い出を記して、堀江君の霊の御冥福を心からお祈り申し上げる。